

幻の日本人 学校の

三年だけの青春物語

ベトナム南部の商都ホーチミン市（旧サイゴン）を代表する街路、チャンフンダオ通り。市中心部からこの通りを西へ行くと、車のシヨールムに隣接して古びた洋館が佇む。かつてそこは日本の外地校、「南洋学院」の校舎だった。わずか3年で閉校となったため、その存在を知る人は少ない。幻とも言えるこの学校の姿を、齢80を越えてなお鮮明な記憶を語るOBの証言を交えつつ甦らせてみよう。

取材・文…玉居子精宏
写真…大池直人



計3期、110名が学んだ南洋学院の旧校舎。現在は、ベトナム企業がここに事務所を構える

「これがあの学校か……」私は色あせたコロニアル建築を見上げ、しばし感慨にふけた。1942年、「南方開発の指導的人材」を育てるため、日本中から選抜された学生を擁して開校した高等専門学校、南洋学院が、そこにあったのだ。

ベトナムと聞けば、まず「ベトナム戦争」、昨今では「ドイモイ・経済成長」、「雑貨・料理」を思い浮かべる人が多いはず。その国に日本の学校があったとは——数年前、偶然にも同校の存在を知った時、私は不思議な思いにとらわれた。

「外地校」、この言葉からして耳に馴染みがないが、海の外にも日本が広く力を及ぼしていた戦前・戦中期、それはさほど珍しくなかったようだ。有名な高等教育機関としては、旅券なしで渡航できる上海に「東亜同文書院」、関東軍がつくった満州国に「建国大学」などがあつた。海外雄飛を夢見る若者たちにとって、それらはごく当たり前に進学先として考慮の対象となったという。

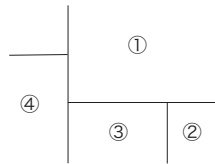
だが当時ベトナムは仏領インドシナ連邦（仏印）の一部である。紛れもない「外国」に開校している点で、南洋学院は類例のない外地校だったのではないか——私はそんな風にも思った。

「欧米列強からアジアの植民地を解放する」と声高に唱えられていた大戦中、あえてフランスの植民地に渡った若者たちも、存命であれば80歳を越えるはず。時代の生き証人の声を聞くチャンスは今しかない。そもそも当の学生らは何を指し、どんな学生生活を異邦に送ったのだろう。疑問を胸に、私は日本全国にOBを訪ね歩いた。「戦時下の息苦しい内地から外に出たかった。だから南洋学院に入ろうと思った」

数々の質問をぶつける私にOBらは口を揃え、まず志望動機を明らかにした。それは予想外にシンプルなものだった。

競争率数十倍の厳しい試験を突破して入学・渡航すると、彼らの希望を叶えるかのように、戦火なき仏印のサイゴンでは、「戦時」とは思えない自由な学生生活が待っていた。

例えば——内地にいれば免れな



- ①市内の市場の青果売り場
- ②カドヤの女主人ニューさん
- ③暗くなるとあらゆる種類の屋台が街に出る
- ④歩道に出たコーヒー屋はいつでも大繁盛だ



だがサイゴンで刻んだ青春の記憶は、OBの脳裏から消えることがなかった。彼らの眼差しが戦後のベトナムにも注がれ続けたからこそ、日本語学校も生まれたのだろう。

国策を論じる高みからでなく、一時の旅行者としてでもなく、日本とベトナムの絆を草の根から深めた特異な存在、それが南洋学院だと見えるかもしれない——古びた校舎に始まったサイゴン探訪の終わりに、私はそう思った。

日本での取材の際、「ベトナムに骨を埋める覚悟でしたよ」と語るOBは多かった。だが1945年8月の敗戦は、青雲の志に燃える彼らの運命を無情にも変えた。復員して祖国の復興に尽くす。そう割り切る他なかった。帰還すれば混乱と貧窮に喘ぐ世情、生き抜くことこそ先決だった——

夕暮れを待つ市内のある橋に向かった。夕食を終えた学生らが、メコンデルタに落ちる夕日を眺めたその橋の上に立つと、額をなでる風が心地よい。祖国を遠く離れた若者が抱いたであろう感傷が、ふとした瞬間に共有できる気がした。

フリーイウと呼ばれる米麺が人気らしかった。私はこれを好んで食べたというOBの回顧談を思い出した。

街を歩くなかで頻繁に出くわしたのが路上屋台だった。この種の店では大勢で来てお店の写真を撮って帰りましたね」という。おそらく彼らは南洋学院OBだ、みんな今もお店に愛着を持っているのだと説明すると、彼女は合点があったように「そうだったんですね」と微笑んだ。

「でも10年ほど前、年輩の日本人が大勢で来てお店の写真を撮って帰りましたね」という。おそらく彼らは南洋学院OBだ、みんな今もお店に愛着を持っているのだと説明すると、彼女は合点があったように「そうだったんですね」と微笑んだ。

「でも10年ほど前、年輩の日本人が大勢で来てお店の写真を撮って帰りましたね」という。おそらく彼らは南洋学院OBだ、みんな今もお店に愛着を持っているのだと説明すると、彼女は合点があったように「そうだったんですね」と微笑んだ。

活そのものが、ベトナムを深く愛する心を育んだのである。

私は数々のエピソードを語って倦まないOBに接しながら、いつしか彼らを魅了した「サイゴン」を体験したいと思うようになっていった。

そんな私のサイゴン訪問がついに実現し、旧校舎を見上げた瞬間、目で肌で感じられる「歴史」に体が熱くなった。その洋館は往時を彷彿とさせ、「南方進出」を採った昭和日本の証跡が確かに感じられた。



校門を出る学生（出典：亀山哲三著『南洋学院——戦時下ベトナムに作られた外地校』）

い勤労働員などない。放課後や休日には空襲に脅えることもなく、思うがまま街に遊ぶこともできる。また日本は戦中、食糧不足に苦しんだが、サイゴンの市場は熱帯の恵みに溢れ、街中でもたやすく食べ物にありつける。こんな別天地にあつて、日毎に街や人に向ける愛着は増していったという。

「日本の南進政策の魁にとの気鋭に満ちていましたよ」と建学の目的を思わせる言葉で当時を振り返ったのは、一期生の東正知氏（84）だった。彼は「ゴム園を経営してみたい」と将来図を描きつつ、「近所の娘さんの誕生日に招かれたり結婚話が出たりした」と懐かしむほどに、安南人（仏領期、ベトナム）の呼称は一般的でなかったとの交流を深めていった。

「安南人に対する気持ちは好奇心から好意に変わりましたね」と回想する

彼は戦後、放送局勤務の傍ら、ベトナムを題材にしたエッセイや小説を多数発表してきた。その素地は学生時代に固められたのだった。

南洋学院では仏語と並び、安南語の

習得に力が注がれたが、「授業は出なかった、試験も受けなかった」と公言する三期生の蛭川弘尹氏（81）の「学習」は一風変わっていた。

「市電で子供向けの安南語の本を読んで発音してみるでしょう？すると周りの人がボンファーイ、ホンファーイ（ちがう、ちがうの意）つて直してくるんですよ」

世界一発音が難しいとも言われるベトナム語、それを地元庶民に接して学んだ彼は、内地に帰還後も語学習得に励み、ベトナムとの貿易事業に長く取り組んできた。1991年には、学友たちとサイゴンに「南学日本語クラス」を開校させた。これはベトナム人学生を対象とした「学費無料」という画期的な日本語学校だった。

「大東亜共栄圏」を謳う日本からやって来はしたものの、国策とは無縁の生